

# 帯広市大空遺跡の第二次発掘調査報告

An archaeological report of the 2nd excavation in Ohzora site, Obihiro city

山原 敏朗<sup>※</sup>

Toshiro YAMAHARA

## はじめに

ここで報告する大空遺跡の発掘調査は、平成7年度(1995年度)に帯広市教育委員会が実施した南部土地区画整理事業地内にある都市計画道路3・4・61緑親通整備工事に伴う発掘調査報告である。この発掘調査に関する成果は、これまで概要のみの報告であったが(山原 1996)、本稿をもって正式報告としたい。

## 1 大空遺跡の位置と周辺の地形

大空遺跡は帯広市街地の南西、空港南町に所在する旧石器～縄文時代の遺跡で、売買川とウツベツ川に挟まれた標高約80mの緩やかな斜面をもつ微高地上に立地している。周辺にはこのような微高地が北東―南西方向に点在しており、これら周辺の微高地においても大空遺跡と同様、旧石器～縄文時代遺跡の存在が確認されている(図3, 北沢・山原 1995)。しかし、現在では大空遺跡を含め、その大半が大規模開発により削平され、往時の地形をとどめる場所は少なくなっている。

大空遺跡等が立地するこれらの微高地は、十勝平野を構成する大規模な河岸段丘面が侵食されて形成された地形と思われるが、地質学的な段丘面区分でいえば、最上位の段丘面(光地園面)より数えて4番目の基松面と称される段丘面上に位置する(十勝団体研究会 1979)。

## 2 発掘調査に至る経過

発掘調査に至る経過は次の通りである。平成6年度、都市計画道路3・4・61緑親通整備工事(道路拡幅工事)に伴う埋蔵文化財保護のための事前協議書が帯広市長より提出された。工事予定範囲が大空遺跡の包蔵地内であったことから、北海道教育委員会の依頼を受けた帯広市教育委員会が試掘調査を実施することとなった。試掘調査の結果、工事予定範囲内に後期旧石器時代の遺物が出土することが確認されたが、工事の変更・中止は困難であることから、遺物の出土が予想される範囲について緊急調査を実施する必要性が生じた。そのため、平成7年7月1日から同月15日にかけて帯広市教育委員会が調査主体となり調査を実施することとなった。

なお、大空遺跡は平成3年度に道営畑地帯総合整備事業川西第2二期地区用地内客土工事に伴う発掘調査が帯広市教育委員会によって行われており(北沢 1993)、今回の発掘調査は第二次調査となる。

※ 帯広百年記念館学芸員

### 3 土 層

帯広市街地付近の基本土層は図1に記したとおりであるが（北沢・山原1997），発掘調査区域内ではIVb層より上位の自然堆積層はすでに消失しており，I層（耕作土）を除去すると，すぐにIVb層（黄褐色粘質土層，ハード・ローム），V層（恵庭a降下火山灰層），VI層（暗褐色粘質土）が現れる状況であった（図4）。

### 4 発掘調査の方法

#### 発掘区の設定

第二次調査の発掘区域は，第一次調査の南西約30mに位置する（図3）。第一次調査において設定された発掘区は，今回の発掘区域まで及んでいなかったため，発掘区は新たに設定した。今回の発掘調査では，道道八千代線と南10線（緑親通り）との交差付近に基点（0，0）を設定し，そこから西方向をX軸，北方向をY軸とした（図2）。ただし，X軸については第一次調査の発掘区の延長線上に合致するように設定しており，本調査における発掘区X=6列が第一次調査のX=15列に対応する。

#### 発掘調査の方法

発掘予定区域のうち，東側はすでに従前の道路工事の際に大きく削平されていたため，発掘面積は実質的に300m<sup>2</sup>であった。調査にあたっては幅1mのトレンチを南北方向に設定し，状況に応じて発掘区域を拡張する方法を採用した。発掘深度は概ね，トレンチ調査ではVI層まで，拡張部の調査ではV層まで掘り下げている。なお，今回の発掘調査にあたっては静修女子大学（現，札幌国際大学）考古学研究会の協力を得た。

### 5 遺物の出土状況

遺物は573点出土しているが，そのほとんどは耕作土からのものである。

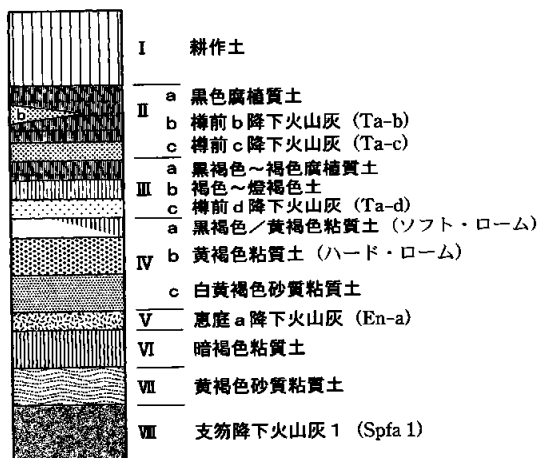


図1 遺跡周辺の基本土層

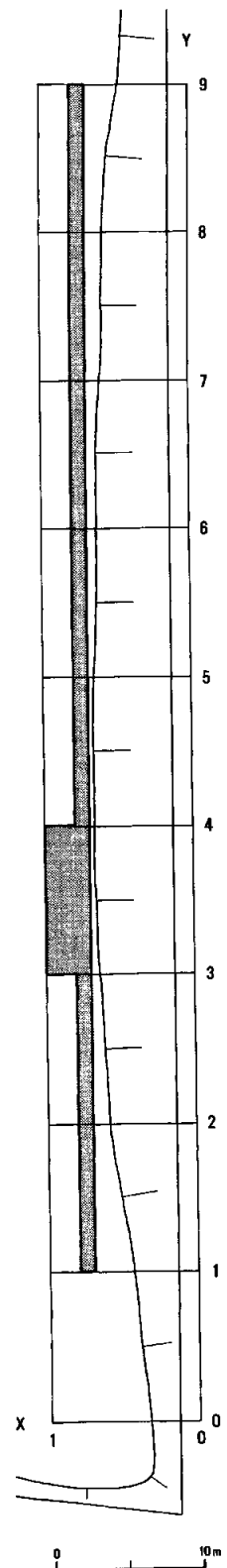


図2 発掘区の設定とトレンチの位置

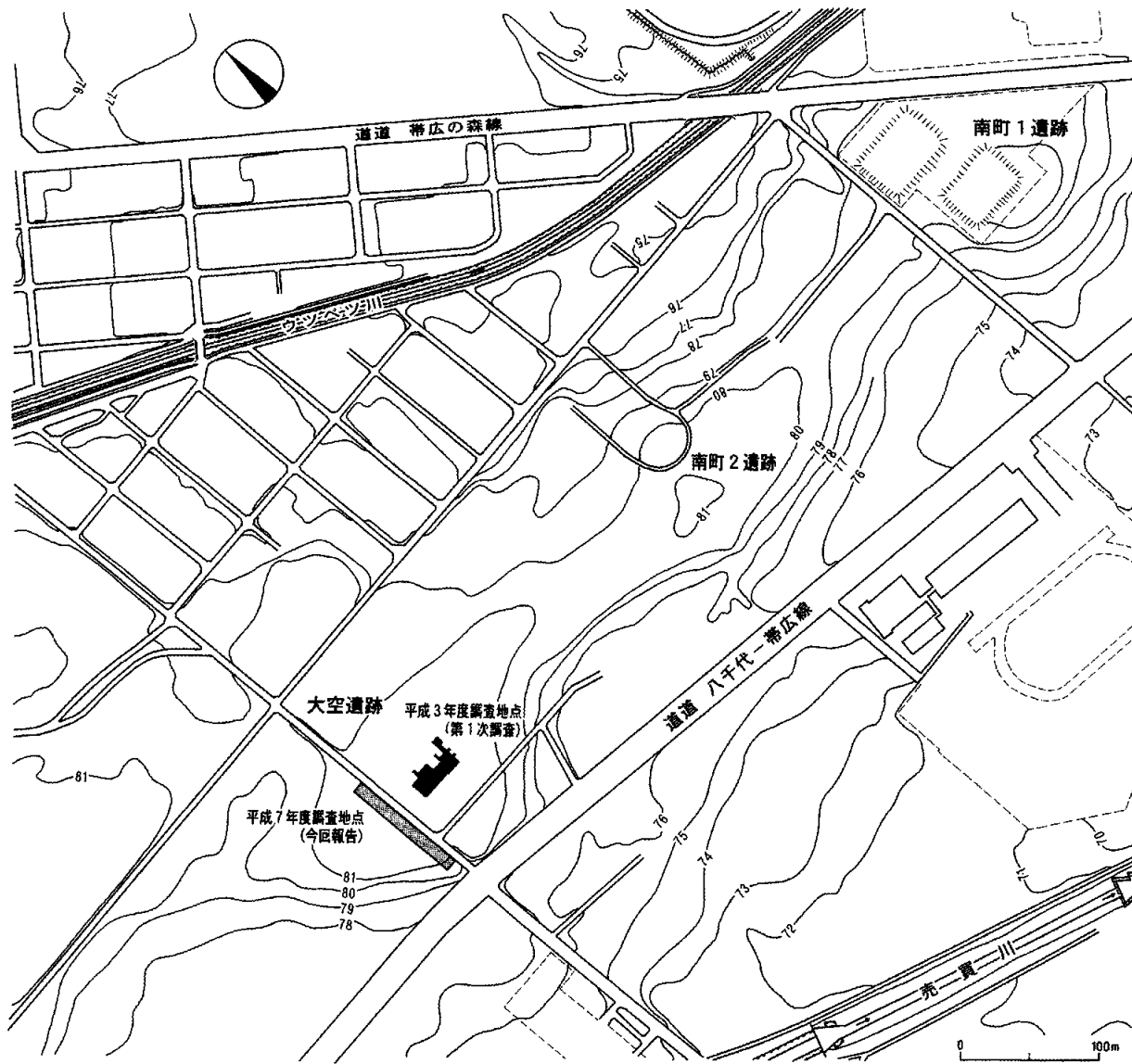


図3 遺跡周辺の地形 (1:5,000) (平成2年時の帯広市現況図をトレース。住宅は省略)

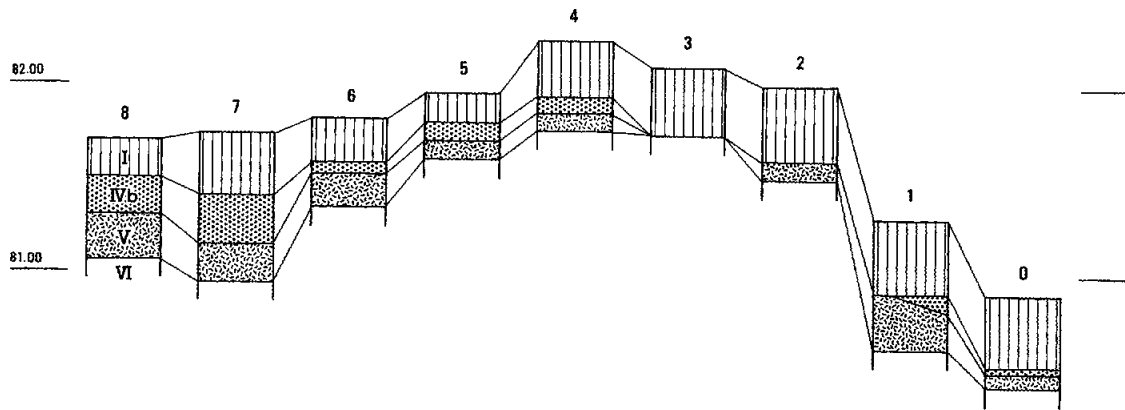


図4 土層

出土した遺物の主体は旧石器時代に属するものである。その大部分は0-3区、とくにその南半から出土している(図6)。加えて0-3区南半の拡張範囲においては、V層を中心に碎片ながら11点の遺物が出土していることから、本来0-3区南半内に遺物集中域が存在していたことはほぼ確実であると思われる。微地形的な視点からみると、遺物集中遺跡が存在したと推測される0-3区南半は、微高地の頂上部と斜面部とを区別することが可能な傾斜変換地点の近くに位置している(図4)。

縄文時代に属するものは5点出土している。このうち土器片は0-2区、0-7区から出土している。これらは晩期の所産と判断できるが、小片のため掲載していない。

石器類の石材は、後期旧石器時代の遺物に属するものの中において、頁岩が破片に1点、メノウが石刃と剥片に3点みられるが、それら以外はすべて黒曜石である。

## 6 遺物説明(図5)

**細石刃(1)**：1点のみの出土である。反りがほとんどなく、背面右には細石刃核の器体調整面がみられる。両端ともに欠損している。

**搔器(2・3)**：3点(接合後2点)出土した。2は刃部片で、破損は耕作によるものである。剥片素材の可能性が高い。3は石刃素材で、破損は耕作によるものである。素材の打面部縁辺には摩滅面(矢印範囲)がみられ、打面は複剥離面、打点は口唇状である。背面には岩層面が残存する。素材面と加工の剥離面とでは傷の付着度が異なり、後者は前者に比べて光沢がある。刃部は右側に偏るが、このうちの直線範囲が切り合的には最も新しい。左側は階段状剥離が著しく、それを除去する目的で直線範囲の加工が施されたと推測される。

**削器(5)**：1点のみの出土である。大型の両面調整石器の製作剥片が素材と思われ、破損は耕作によるものである。両側縁に刃部加工が施されているが、右側縁については加工が現存資料の下端まで及んでいない。

**石刃(4・6~8)**：5点(接合後4点)出土した。4はメノウ製で末端部には石核調整面が取り込まれている。側縁に連続的な剥離痕がみられるが、非常に薄い平坦剥離面であり、加工かどうかは判断しがたい。6は石刃の頭部片で、打面は複剥離面である。打面縁辺を潰すような調整(矢印範囲)がみられる。7も石刃の頭部片である。打面は単剥離面であるが、剥離面自体は小型と推測されることから石核自体には打面調整が施されていたと思われる。打面縁辺には摩滅面(矢印範囲)がみられる。石質や打面、打点等の特徴は搔器(3)のそれと類似している。8は両端が耕作により欠損しているものの、破損状況からみて推定される完形品の大きさについては現存資料と大差はないと思われる。

**石核(9)**：0-7区から出土した縄文時代に属すると思われる石核である。円礫の分割面を作業面とし、求心状に剥片剥離が行われている。石質は黒色不透明で不純物が多い。なお、周辺から出土した剥片も同石質のものである。

## 7 結 語

第2次調査においては遺物包含層がほとんど消失していることもあり、遺物の出土状況は決して良好とはいえないものであった。しかし、耕作土からの遺物出土状況や、わずかに残存していた包含層から出土した遺物の出土範囲からみて、0-3区南半付近に遺物集中域が存在していた可能性は高く、この周辺から出土した石製遺物は一つの石器群に属するものとして理解しても大きな誤認にはならないと思われる。

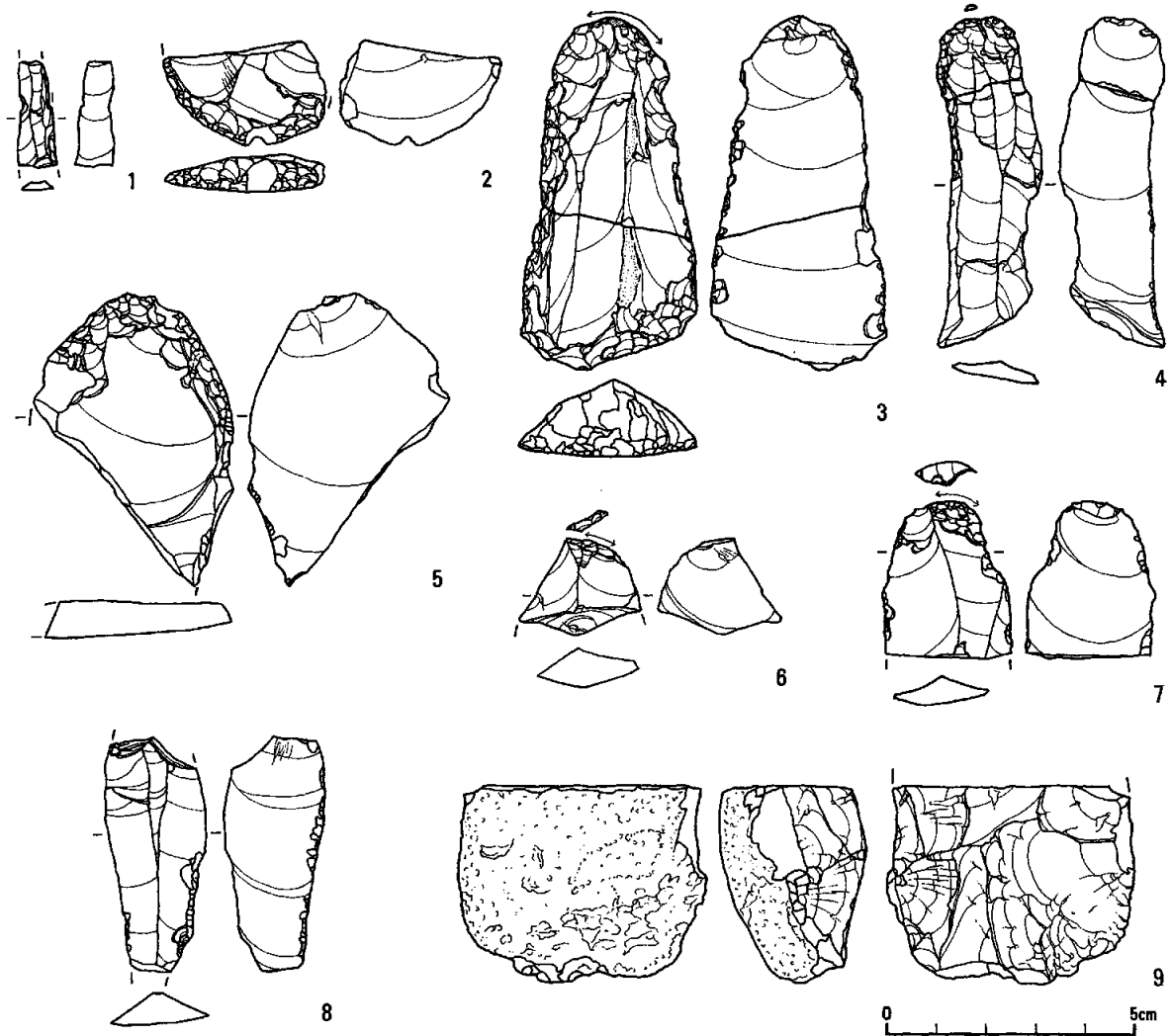


図5 出土遺物 (S=2/3)

Y	旧石器	縄文
8		1
7		3
6	1	
5	5	
4	3	
3	510	
2	19	1
1	1	
0		
	0 X	

図6 グリッド別出土遺物数

表1 出土遺物一覧

	土器	石器	石核	剥片	計
旧石器		10		556	566
縄文	2		1	2	5
計	2	10	1	558	571

表2 旧石器遺物一覧

	剥片石器群								計
	石器					剥片			
	細石刃	搔器	石刃	R・UF	石器小計	剥片	碎片	剥片小計	
0-0	0	0	0	0	0	0	1	1	1
0-1	0	1	1	0	2	5	12	17	19
0-2	1	2	2	0	5	106	399	505	510
0-3	0	0	1	0	1	1	1	2	3
0-4	0	0	1	1	2	2	1	3	5
0-5	0	0	0	0	0	1	0	1	1
0-6	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0-7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0-8	0	0	0	0	0	0	0	0	0
試掘・表採	0	0	0	0	0	13	14	27	27
計	1	3	5	1	10	128	428	556	566

出土石器は細石刃、搔器、削器、石刃である。このうち、細石刃は1点しか出土していないものの、その特徴は第一次調査で出土したような、忍路子型細石刃核から製作された小型で反りの強い細石刃とは大きく異なる。また、一部の石刃や石刃素材の搔器も第一次調査のそれとは大きさや頭部調整方法等の特徴が異なる。これらのことから、現状においては第一次調査で出土した忍路子型細石刃核を伴う石器群とは内容の異なる石器群として理解しておきたい。なお、剥片には両面調整石器の製作時に生じたものが多く含まれている。両面調整の石器類自体は出土しなかったものの、ここでの製作内容の主体は両面調整の石器類に関するものであったことが推測される。

## 引用文献

- 北沢 実 1993 『帯広・大空遺跡』帯広市埋蔵文化財報告第12冊  
 北沢 実・山原敏朗 1995 『帯広・南町遺跡』帯広市蔵文化財報告第14冊  
 北沢 実・山原敏朗 1997 『帯広・稲田1遺跡』帯広市蔵文化財報告第15冊  
 十勝団体研究会 1979 『地団研専報22 十勝平野』地学団体研究会  
 山原敏朗 1996 「大空遺跡」『平成7年度市町村における発掘調査の概要』北海道教育庁生涯学習部文化課

表3 掲載石器計測表

図番号	名称	層位	長さ	幅	厚さ	重量	遺物番号	備考
5-1	細石刃	I	(22)	0.8	2.5	<1	0-3-19	被熱
5-2	搔器	I	(21)	32	6	4	0-2-3	被熱
5-3	搔器	I	70	35	14	31	0-3-14	
5-4	石刃	I	66	21	5	6	0-3-20	メノウ
5-5	削器	I	(59)	40	7	16	0-5-1	
5-6	石刃	I	(19)	25	8	2	0-2-4	
5-7	石刃	I	(31)	26	7	5	0-4-1	
5-8	石刃	I	(47)	20	7	6	0-5-2	
5-9	石核	I	(40)	50	29	61	0-7-2	



写真1 出土遺物

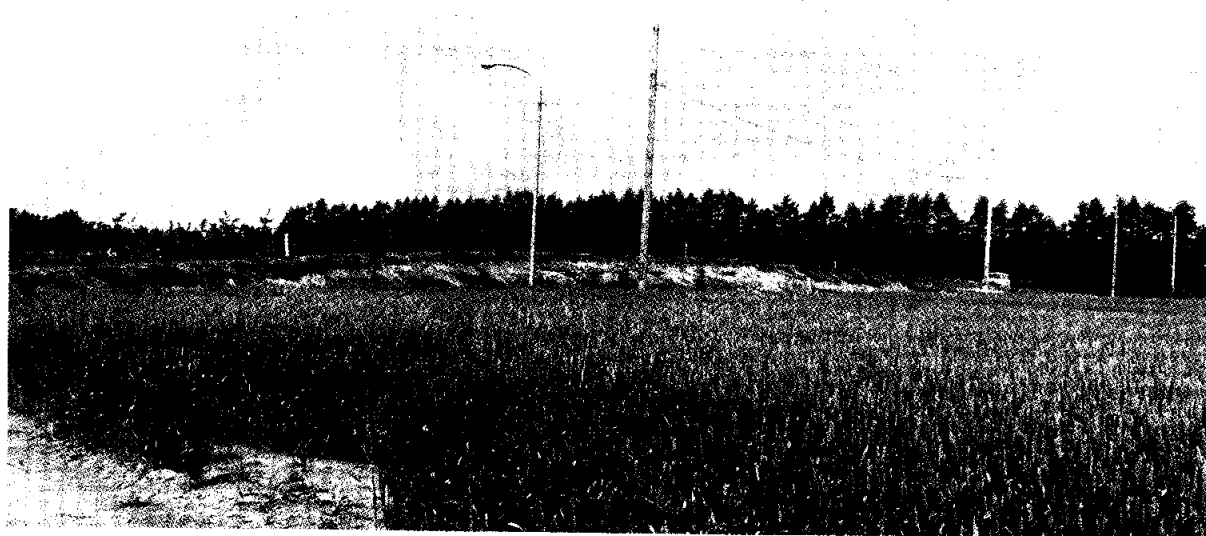


写真2 遺物近景 (NE→)



写真3 調査状況 (NE→)



写真4 完掘 (0-3区, N→)